

## 国指定史跡

## 川平貝塚

## 国指定史跡 川平貝塚の概要

川平貝塚は、1904（明治37）年に鳥居龍蔵氏によって調査されました。

鳥居氏の発掘は、東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎氏博士の命により実施されて、この一連の調査は、沖縄県において初めての発掘調査となりました。

彼が八重山を訪れた1904年は、その年の2月には翌年まで続く日露戦争が勃発し、不安定な社会情勢の最中でした。鳥居氏の残した功績や投げかけた問題点からは意外なようにも思えますが、台湾からの帰途に本島に立ち寄ったのを除けば、本格的な沖縄調査は後にも先にもこの時だけだったと言います。しかしながら、日露戦争下において2ヵ月（6月～7月）もの時間を費やし、沖縄本島から宮古・八重山、与那国島まで出向いた調査は、研究史的にもとても重要なものであり、彼が発掘した獅子岡と隣接する仲間岡は、1972（昭和47）年5月15日に、国指定の史跡となりました。



東京大学総合研究博物館所蔵

## 外耳（ソトミミ）土器と鳥居龍蔵

鳥居が、石垣島調査の概要を記した「八重山の石器時代の住民に就て」を発表したのは1905（明治38）年のことです。その中で「(a) 獅子森の遺跡」と「(b) 四ヶ村の西端の遺跡」として2ヵ所の遺跡を紹介しました。特筆すべきことは、7月20日から行った獅子森の遺跡（現川平貝塚）の調査において出土した把手の付いた土器（左写真）を「余はこの土器の有する『耳』はよくこの土器のキャラクテルスチックの所を示すものなりと思ふ。故に余はこれを殊更に呼ぶに、今こゝに『外耳土器(そとみみどき)』なる名称を以て云はんとす。」とし、沖縄本島を含め、どこの地域でも発見例がないことを述べ、台湾など南の島々との関係を示唆していることです。

この呼称は、現在でも「外耳（がいじ）土器」として、八重山考古学で一般的に利用されています。

## 変化した主張、そして晩年の回顧

1925（大正14）年に発刊された『有史以前の日本』（改訂版）で、鳥居氏は先の主張を大きく変えることとなります。「(前略) 八重山の遺跡は同島民、すなわち吾人祖先のものであって、弥生式派（固有日本人）に属する」と記し、沖縄本島の遺跡と八重山の遺跡は全く別物で、アイヌの石器時代遺跡と直接の祖先である弥生時代の人々（固有日本人）の弥生式土器使用石器時代遺跡と相違しているのと同じであり、八重山の土器の形式はまさしく弥生式系であるという主旨の内容を発表しました。主張が大きく変化した背景には、弥生土器の発見があります。縄文土器と比べ、無文化が進んだ弥生土器に、彼は、八重山諸島出土土器との共通点を見出したのでしょう。しかし、晩年、鳥居氏が発表した『ある老学徒の手記』（1953年刊）という著書には、「この土器の製作形式が、かの台湾東海岸花蓮港附近阿眉族（ami）紅頭嶼ヤミ族（Yami）の現今製作土器と類似している」と、改めて南の島々との文化的な関係に思いをはせています。

なお、現在の研究では、14世紀～15世紀頃の遺跡であることがわかっています。



説明版設置場所

川平ロータリー

## 川平貝塚を見学なさる皆さまへ

川平貝塚の標柱及び説明版は、道路脇に設置されていますが、上述のように、遺跡は北側の丘の部分になります。

なお、隣接地まで車で入ることは可能ですが、近くには地域の方々が大いせつに拝んでいる群星御嶽があり、無断立ち入り禁止区域となっております。

見学の際には、地域の皆さまに配慮し、むやみに聖地に立ち入ることがないように、ご協力をお願いします。なお、同御嶽は、祭祀行事に利用されることから、日程によってはこのルートで遺跡に近づくことが無理な場合もございます。

※進入路は、畑の間を抜けるため、車高の低いレンタカーには不向きです。